

さい ご
最後にひとつだけ
ねが
お願いしても
よろしいでしょうか②

おおとり
鳳ナナ・作

ほおのきソラ・絵



アルファポリスきずな文庫

も
く
じ

第一
章

断じてデートではありません。
拳で躰をして差し上げましょう。

第二
章

ボンボンボンボンボなレオお兄様。

第三
章

卑怯ですわこの腹黒王子。

第四
章

ようやく会えましたね拳の想い人。

第五
章

撲殺劇の始まりですわ。

第六
章

覚悟はよろしくて？ 我が愛しのお肉様。

あの世で詫ひてきなさい。

楽しいお茶会を始めましょう。

「ブツ飛ばしてもよろしいですか？」

あとがき

230

208

194

178

136

111

084

065

049

032

006

登場人物紹介



ゴドワイン

パリスタン王国の宰相。悪徳貴族たちをまとめていた。スカーレットの命を狙っている。



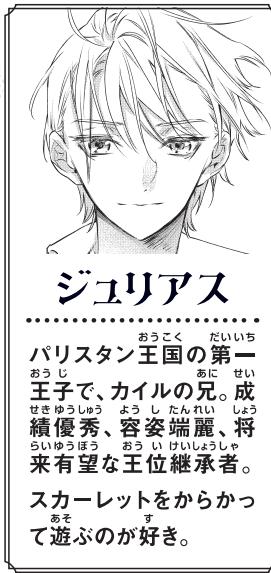
ナナカ

獣人族の男の子。スカーレットに近くづくため、ヴァンディミオン公爵家でメイドをしていた。



シグルド

騎士団長の息子。ジュリアスの命でカイルたちについて調べていた。眞面目な好青年。



ジュリアス

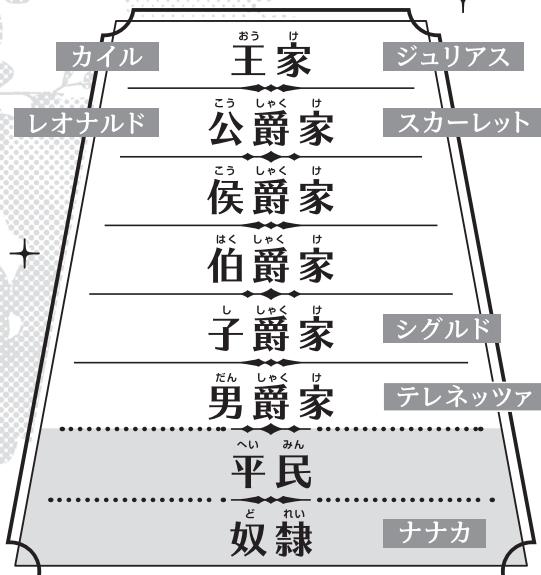
パリスタン王国の第一王子で、カイルの兄。成績優秀、容姿端麗、将来有望な王位継承者。スカーレットをからかって遊ぶのが好き。



スカーレット

ヴァンディミオン公爵家の嬢様。第二王子カイルの婚約者だったが、婚約破棄される。“氷の薔薇”、“狂犬姫”などの二つ名を持つ武闘派令嬢。

爵位



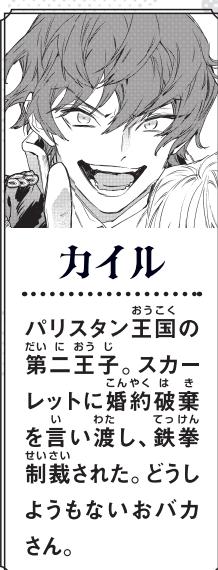
レオナルド

ヴァンディミオン公爵家のご令息で、スカーレットのお兄ちゃん。破天荒な妹と腹黒上司のせいで冒険が手放せない。



テレネット

だんしゃくれいよう男爵令嬢で、カイルの恋人。スカーレットと婚約破棄するようカイルをそそのかした。



カイル

パリスタン王国の第二王子。スカーレットに婚約破棄を言い渡し、鉄拳制裁された。どうしようもないおバカさん。

第一回 断じてテートではありません。

ジュリアス様が仲介屋さんから奴隸商の情報を聞き出した翌朝。わたしとナナカは、王都グランビルデにある貴族街を訪れておりました。高級な邸宅が立ち並ぶこの場所に住んでいるのは、高位の爵位を持つ上位貴族の方々です。

彼らは王宮に勤めている要人であり、自分たちが管理する領地ではなく、別邸があるこの街区で暮らしています。まさか、思いもしませんよね。

よりもよつて、奴隸の所有を禁止しているこの国の中心地で、堂々と奴隸商をしている方がいらっしゃるなんて。

ここ的情報を聞いた時は驚き、また感心したものです。貴族の邸宅であれば、多少怪しまれても、そう簡単に捜査できませんからね。特に上位貴族の邸宅であればなおさらです。私とナナカは、その中のとある邸宅を訪ねました。

ちなみに功労者であるジュリアス様は、捜査のためとはいえ、王子が奴隸を買いに行くのは問題があるので、宿でお留守番。いい気味ですね。

ようこそいらっしゃいました。美しいお嬢さん。なんでも、珍しい奴隸をお求めだとか

客間に通されると、いかにも高級な椅子に腰かけた貴族が、こちらを踏みするような口調でおっしゃいました。

ザザーラン伯爵。

この街区に住む上位貴族の中でも、特に羽振りのいい殿方です。一見穏やかな老紳士に見えますが、その正体は奴隸商の畜生でござります。人は見かけによらないのですね。

「しかしこれませんな。いくらご両親に内緒で奴隸が欲しいからといって、貴族のお嬢様がジャンクのようなチンピラに関わっては。あなたの品位を落としますぞ」

「他にツテがなかつたもので、仲介屋のジャンクさんに頼むしかなかつたのですよ。ザ

ザーラン様は、あの方とはどんな関係ですの？」

「なに、大した仲ではありませんよ。スラムには時折、希少価値がある奴隸候補が逃げ込んで来るのでね。そういうた場合には、他の奴隸商ではなく私のところへ連れてくるよう、契約を結んでいるだけです。ああ見えてあれは顔が広い。私以外にも、この街区に住んでいる貴族や奴隸商と繋がりを持つているようですからな。まつたく小狡い輩です」ナナカがジャンクさんことを知っていたのも、ゴドワイン様が王都のスラムにいる仲介屋として名前を出しているのを聞いたことがあつたからだそうです。そしてジャンクさんが紹介してくださつたこの奴隸商なら、必ずオーフショponに参加しているはず。遠回りにはなつてしましましたが、ここでの交渉がうまく行けば、なんとか奴隸オーフショponへ潜り込めそうですね。

「希少価値のある奴隸を捕まえていると聞きましたが、例えほどのような？」

よくぞ聞いてくれましたとばかりに、ザザーラン様が両手を広げて語り出します。

「そうですね、例えはエルフ、ドワーフ、有翼人、魔族……ああ、そうそう。そこにいる獸人族なんかも、とても希少価値がある商品ですよ」

隣に座つてゐる執事姿のナナカが、ビクッと身体を震わせます。

平静を裝つてはいるものの、どこか不安げな顔をしていますね。

大丈夫ですよ、ナナカ。私たちの立てた作戦はきつとうまくいきます。

「なぜ彼が獸人族だとわかつたのですか？」

「黒髪で琥珀色の瞳は獸人族の特徴ですからな。それに、わざわざ私のもとまで奴隸を求めてやつてくるようなお方だ。希少な奴隸の一人でも連れているべきでしょ。そうでなければ、私としても商談をする価値がない。いやはや、言葉で語るよりもよほどいい名刺になつてくれましたな、彼は」

ははは、と笑い声を上げるザザーラン様に微笑で返します。

「……ダメだぞ」

はいはい、わかつていますよナナカ。

どんなに目の前に腹が立つ相手がいたとしても、本命であるゴドワイン様を殴るその時
までは極力、我慢しますから。たぶん。

「それで、どんな奴隸をご所望で？ 獣人族を所有されているお嬢さんのお眼鏡にかなう
ような商品が用意できるといいのですが」

さて、本番はここからですわね。
私はテーブルに置かれていた紅茶を一口だけ口に含んでから、わざとらしく髪先をいじ
くり回して言いました。

「私は、奴隸を買うつもりでここに来たわけではありませんの」

「ほう？ ではなんのご用で？」

「もうすぐ王都のどこかで奴隸オークションが行われるとの噂をお聞きしました。私もそ
のオークションに行つてみたいのですが、紹介してはいただけませんか？」

「ああ、オークションですか。なるほど。ふむ……」

ザザーラン様が腕を組み、黙り込みます。

やはり目の色が変わりましたか。オークションは個人で奴隸を売るのとは比べものにな
らないほど、大きな案件でしようからね。そう簡単に承諾できないのでしよう。
予想通りの展開です。

あとはこの欲深な方が、私たちの用意した餌に食いついてくれるかどうかですね。
「……オークションに招待されるためには、奴隸を何度も売買したという実績が必要です。
さらに身分を明らかにして、審査を受ける必要があります。これには最低でも半年間はか
かるため、いまから準備をしても到底間に合わないでしよう」

「そこをどうにかなりませんか？ お金ならいくらでもお支払いいたします」
切実な口調で訴えかけます。

するとザザーラン様は、首を横に振つてから口を開きました。

「いえ、お代は結構。その代わりと言つてはなんですが——」

ザザーラン様がニヤリと笑みを浮かべます。

それは、隠されていた醜悪な本性が剥き出しになつたかのよう、おぞましい笑顔で
した。

その代わりと言つては
なんですが

そこにいる獣人族の奴隸を
私にお譲りいただけるので
あれば――

「もし、そこにいる獣人族の奴隸を私にお譲りいただけるのであれば、私の親戚の娘とで
も偽つて、なんとかしてあなたをオーラクションへお連れしましよう。こちらも相応のリス
クがある話ですが、お互にとつて悪くない条件かと。どうでしようか」

ナナカと視線を合わせてうなずきます。

うまく餌に食いつきましたね。作戦成功です。

あとはこちらも用意していた言葉で返すだけですわね。

「まあ、たつたそれだけで紹介していただけますの？　ならばよろしくお願ひいたしました。

パチン、と手を叩いて喜びを露わにする私に、ザザーラン様も満足そうにうなずかれま
した。

「では、商談成立」ということで。オーラクションは三日後の夜になりますが、その獣人の奴
隸紋の譲渡はいつ頃行いましょうか」

三日後ですか。ナナカの情報通りですね。

「この者は奴隸ではあります、わが家の都合から刻印はしておりません。よつて奴隸紋

の譲渡は不要ですわ」

「なんと！ 奴隸紋を刻まずに奴隸を飼つておられるのですか？ ズイぶんとその奴隸の躾に自信がおありなのですね。いやはや勇敢なことです。では、いまその奴隸をいただいても？」

「いえ、それは明日にしていただきてもよろしいでしようか。これは当家でも長らく重宝してきました奴隸ですので、別れを惜しみたく……」

「おお、そうでしたか。お気持ちお察しいたしますとも。わかりました。それでは、また明日に。いやはや、オーフショヨンを前にいい商品を入荷できて、こちらとしても助かりましたよ。はつはつは」

「終始穏やかに商談を終えた私たちは、伯爵邸をあとにしました。

お住まいのご本人も含めて、成金趣味のなんとも胸糞悪いお宅でしたね。

できれば二度とお邪魔したくないものです。

「……驚いた」

貴族街を抜け、露店で賑わう王都の商業区に着いた辺りで、ナナカがポツリとつぶや

きました。

「なにがですか？」

「……ちゃんと話し合いで解決することもできるんだなって。絶対に途中で我慢できずに、あの貴族を殴ると思つていた」

その場でナナカの頭を拳でグリグリしてあげました。
躾のなつていない執事をお仕置きするのは、主である私の役目ですからね。

「……痛い。冗談だつたのに」

「自業自得ですわ」

なにはともあれ、オーフショヨンへ招待していただきこどもできて、一安心ですわね。
元々、希少な獣人族のナナカを奴隸として譲る代わりに、信用を得るという作戦でした
が、まさかあちら側から条件としてそれを提示してくれるとは思つてもみませんでした。

「でも、本当によかつたのですか？」新たに刻まれた奴隸紋をあとで消すことはできます
が、明日あなたを引き渡して以降、こちらでは身の安全を保障できませんわよ？ すぐ
助けられるように動くつもりではいますけれど……」

乱れた髪を直してあげながら言うと、ナナカがコクリとうなずきます。

「……大丈夫だ。アイツの口ぶりでは、僕もオーラクションに出品されるだろう。それまでは、手荒に扱われることもないと思う。すべてが解決したあとに、回収してくれれば問題ない」

この作戦は元はといえば、ナナカ自身が提案したものでした。わたしの命を狙つた罪滅ぼしだと言つておりましたが、奴隸紋で命令に逆らえない状態だつたのですから、もう気にしておりませんのに。

「……そんなことより、僕は眠い」

不意にナナカがフランラとよろめき出します。

そういえばこの子……というより獣人族は夜行性でしたね。

我が家でメイドをしていた頃は、意識を覚醒させる魔法の薬を使つて無理矢理起きていたみたいです。けれどここ数日は薬を切らしてしまつたらしく、時折犬歯を剥き出しにして大きなあくびをしていたのを思い出しました。

「宿で寝ますか？」

ふらついて露店に倒れ込みそうになる身体を支えてあげながら言うと、ナナカはもう半分以上寝かかつた表情でつぶやきます。

「……そうさせてもらう。夜になつたら……起き……して」

消え入りそうな声とともに、ナナカの身体がみるみるうちに黒狼に戻つてしましました。突然人間が狼になつたことで、周囲を歩いていた冒険者や、商人の方々が目を見開いて驚いております。

珍しいですね、獣人族は。

「ごめん遊ばせ。どうぞお気になさらずに」

ほほえみながら周囲に会釈をして、ナナカを抱き上げます。

「まつたく。主の手を煩わせるなんて、執事失格ですね」

宿に戻ると、ジュリアス様が暇そうに本を読んでいらつしやいました。

かれ彼はナナカを抱きかかえた私を見るなり「ペットでも飼うつもりか」と茶化してきましたが、当然のよう無視です。無視。

私はジュリアス様のほうを見もせず、ナナカをそつとベッドに寝かせたのでした。

歩いておりました。
ある
じゅうすい
やど
のこ
さんさく

黙睡しているナナカを宿に残し、散策にやつてきたのです。

お屋を過ぎたばかりの通りは賑やかで人も多く、とても活気づいています。

「先ほどの露店で食した肉料理は、地味な見た目ながらもなかなかに美味であつたな。あの店の主人を王宮の料理人として雇えなかいか検討してみようと思うのだが、どう思う?」平民ふうの地味な青色のチュニックで変装したジュリアス様が、私の隣を歩きながらしつとした顔でのたまいました。

あの、地じみな服装をした金きん髪ぱつの方とのがたなんだ、地じみ味みな服装をした銀ぎん髪ぱつの貴きふじん婦人ふじん互いに表面上は二二コリとほほえみながら、向むきあいいます。

「なぜ私についてきていらっしゃるのでしょうか？」
「宿で留守番をするのも飽きたからな。ちょうど外に出ようと思つていたら、偶然タイミン
ングが重なつた。それだけのことだ」

宿を出てからずっと、私の横を歩いているではないですか。

宿を出てからずっと、私の横を歩いているではないですか。

「そうでしたか。では私はあちらにまいりますので、ご機嫌よう

背を向けて、ジュリアス様とは反対の方向に歩いていきます。

せつからく一人で悠々と商業区を歩いて回ろうと思つていましたのに、あのの方と一緒

にいては心が休まる暇もありませんからね。

さて、やはり魔物はいなくなつたことですし、商業区を満喫するにしましようか。

ら、もし買つてくれたら、おまけにこつちのリンゴもひとつつけちゃうよ!」
通りの両端に並ぶ露店から、おじさんが声をかけてきます。

それに答えたのは、なぜか私ではなく別の声でした。

「ならば一つ買うので、おまけも一つ分つけてもらおうか。そつちのマフィンももらおう」

「寄つてらつしやい見てらつしやい！ そこの麗しい銀髪のお嬢さん！ いまならこのミスリル製のネックレスがたつたの銀貨十枚だよ！ もし買ってくれるなら、おまけにこのミスリル製のチョーカーもつけてあげよう！ きっと美しいお嬢さんにピッタリだよ！」

「こんな不純物が混じつた粗悪なミスリル製品があつてたまるか。言いふらさないでいてやるから、代わりに銀貨一枚にまける。もちろんこのチョーカーもつけてな」

「ちよつとそこの銀髪のお方。あなたの背後に禍々しい女の怨霊が見えます。ここで出会つたのもなにかのご縁、いまなら特別にアンデッドに効果のあるこの聖なるパワーストーンを金貨一枚で――」

「残念だが、この娘は怨霊程度なら素手で撃退できる力を持つてはいるからな。余計なお世話だろう。だが、このパワーストーンはいいものだ。よし、私が買い取ろう」

あの……そろそろツッコんでもよろしいでしようか。

「その銀髪のお方」

「なんだ、そこの銀髪の娘」

「ジユリアス様と再びニコ一ツと満面の笑みを浮かべて向き合います。

「先ほどおつしやつていましたよね、偶然外出するタイミングが一緒になつただけだと」

「なんだ、そんなデマカセを本当に信じていたのか？」

「嘘に決まつてはいるだろう。あなた

にもかわいらしいところがあるのだな」

震える拳を、もう片方の手で押さえつけます。

ダメですよ、私。

ここで拳を振るつてはいけません。

よりもよつて王宮が目と鼻の先にあるこの王都で、次期国王のお顔をブン殴るだなんて。

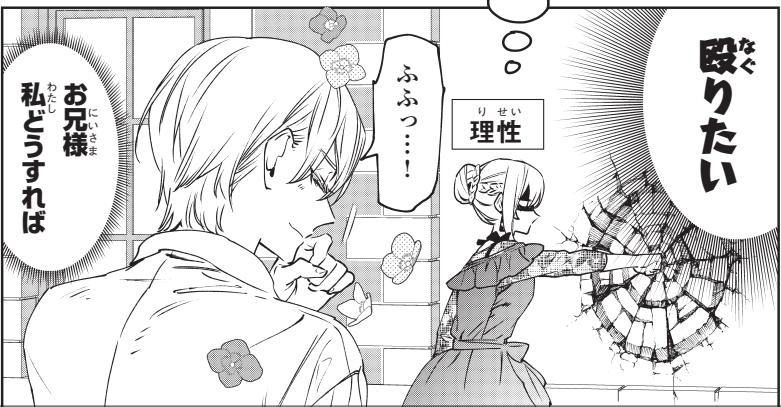
「ふふつ……！」

「ああ、でも欲望に負けて、もう殴つてスカッとしてしまいたい。

お兄様、私どうしたらしいのでしよう。

「口元を手で押さえて、ジユリアス様が笑いをこらえます。」

先ほど
おつしやつっていましたよね
偶然外出するタイミングが
一緒になつただけだと



よし、やつぱり殴りましょ。

「やはりあなたは面白いな。まさかこの私が、愚か者を嘲笑うこと以外で、こんなにも愉快な気持ちになれるとは思つていなかつた」

「それはよかつたですね。さようなら」

顔をそむけて、早足でその場を立ち去ろうとすると、ジユリアス様に手を掴まれました。

「すまなかつた。少しからかいすぎたな」

「まささら謝られても、もう遅いです。

そう思いながらも、一応反省している顔を見ようと半目で振り返ると……

「むぐつ」

口にサクッとしたパンのようなものを突っ込まれました。

リンクとはちみつの甘さがお口いっぱいに広がります。

これはアップルパイでしょうか。とても美味でございますね。

「引つかかつたな」

悪戯っ子のような無邪気な笑みを浮かべるジユリアス様。

抗議の声を上げようとして、急いで口の中のパイを食べると、再び口にパイを差し込まれます。

「ほら、私の分もあげよう。味わって食べるのだぞ」

おいしいのは認めましょう。

ですが、食べ物につられて、私が今までの蛮行を許すと思つたら大間違いですわ。

「同じ店で買つたリングのマフィンもあるぞ」

「仕方ないですね。許して差し上げます」

おいしい甘味には逆らえませんでした。

腹黒だけあつて、人心を操る術には長けていらつしやいますね。

やはり油断なりません、ジユリアス・フォン・パリスタン。

「さすがに歩き疲れたな。少し休むか」

「珍しく意見が合いましたね。そういたしましょう」

商業区の商店を一通り回つた私たちは、王都の中央に設置された噴水の前にやつてきました。

「こちらへどうぞ、レディ」
「あら、気が利きますわね。ありがとうございます」

そこには、私たちと同じように憩いを求めてやつてきた人々が、ところどころに置かれた木の椅子に座つてお話ししていらっしゃいます。

ジユリアス様は椅子の上に大きなハンカチを広げ、気取つたポーズでそこを示して言いました。私はそれを見てくすりとほほえみながら、腰を下ろします。

腹が立つほど様になつてゐるそのお姿に、平民ふうのチュニックがあまりにも似合わないんですもの。つい笑つてしましました。

「ずいぶんとこの街に慣れていらつしやいますのね」
「時折学院を抜け出して視察に来ていたからな。商業区に関しては勝手知つたると言つたところだ」

しつとおつしやつてますが、それは視察ではなくサボりと言うのでは?
そう言つてやろうかと思つたものの、私を淑女として扱つたその姿勢に免じて、今回だけは見逃して差し上げましょう。

「どうだった。わが国自慢の商業区は」

隣に腰かけたジュリアス様が、横目で私をうかがいながらおつしやいました。

「そうですわね。以前カイル様にお昼ご飯を買に行かされていた時は、見て回る余裕がなかつたのですが、こうして改めて見るとしても活気があって面白い場所でしたわ。楽しかつたです」

ジュリアス様があまりにも純粹な、横目で私をうかがいながらおつしやいました。のですから、私は嫌味を言うのも忘れて、思わず普通に答えてしました。

まつたく、甘いですね私。

特にジュリアス様がすすめてくださった甘いお菓子は、悔しいですがとてもおいしゅうございました

「そうか。口に合つたようでよかつた。あれは是非、あなたに食べていただきたいと、ここに来るたびに思つていた。それと、楽しかつたと言つたな。ならば無理矢理ついてきた甲斐もあつたというものだ」

天使のようなほほえみを浮かべながら言うジュリアス様。

「私がからかうためについてきたのかと思つておりましたが、実は商業区を案内して回りたかつたのでしょうか。

それならそうと、最初からはつきりおつしやつていただければ邪険になどしませんのに。天の邪鬼なお方ですね、本当に。

「私は退屈なことが嫌いだ」

遠くから聞こえてくる商業区の喧騒に目を細めながら、ジュリアス様が突然そんなことをつぶやきました。

退屈なことが嫌いじゃない人なんて、なかなかいないのでは?

そう思いつつ、とりあえず私は黙つてジュリアス様のお言葉に耳を傾けます。

「私にとつて、世の中に存在する大抵のものはつまらない。それは退屈を嫌う私には、まるで拷問のようだとさえ思う。だから、せめてこの両目に映る狭い世界ぐらいは、面白いもので溢れていてほしいと願つている」

白く細長いジュリアス様の指先が、そつと私の手を取ります。

幼い頃の私にとつて面白かつたのは、とてもいびつでみにくいものだけだった。だが、



いまは違うと断言できる。それはあなたと出会ったからだ

「ジュリアス様……？」

戸惑う私に、ジュリアス様は不意に顔を寄せてきて、私にしか聞こえないような小さな

お声でささやかれました。

「私は面白いことが好きだ。そして私にとつて、いま一番面白いものはスカーレット、あなたなんだ」

そして、その言葉が終わるや否や、返答する間もなく、私の額にご自分の唇を静かに重ねたのです。

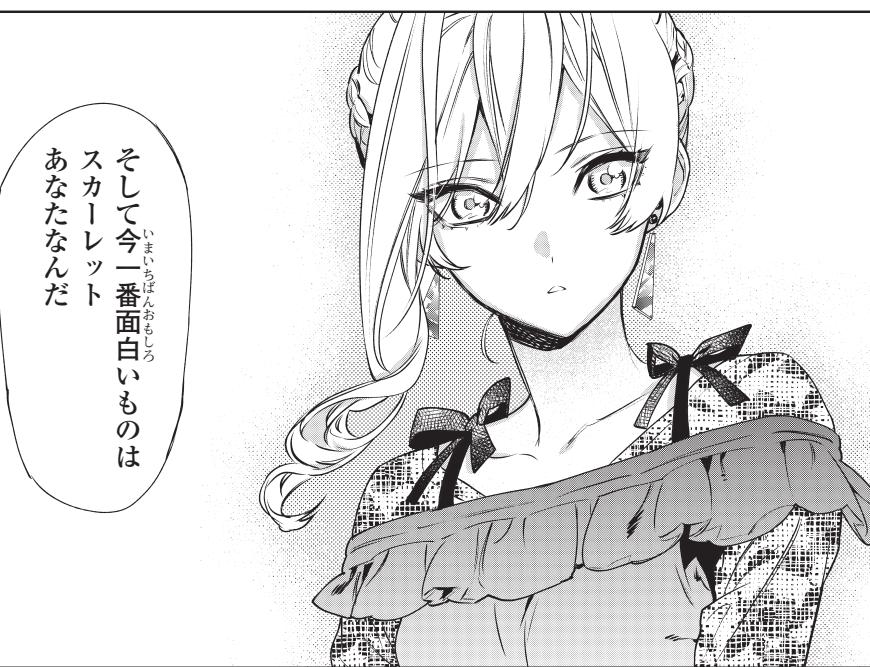
「……！」

あまりに突然のことだったので、私は思わず目を見開いて硬直してしまいます。

ジュリアス様はゆっくりと唇を離し、そんな私を面白そうに見つめました。

「……私のこの想いが、一般的な恋愛感情と異なるものだと自覚している。だが、これだけは言わせてくれ」

「まだに困惑から抜け出せない私に向かつて、ジュリアス様は優しくほほえみながら



そして今一番面白いものは
スカーレット
あなたなんだ

おっしゃいました。

「――スカーレット、私はあなたが愛おしい。この世界の、どんなものよりもいつもとは違う、裏表のない表情を、私はただ呆然と見つめることしかできませんでした。

気がつくと、私はいつの間にか宿に戻つておりました。

「……私は、どうやつてここまで帰つてきたのかしら」

窓から差し込んでいた陽射しは、すでに夕焼けに染まつております。

隣の部屋で寝ているナナカもそろそろ起き出してくる頃でしようか。

そんなことをぼんやりと考えながら、私は初めて人の唇が触れた額に触れます。

「……そうやつてあなたは、また私をからかつて遊んでいらっしゃるのでしょうか？」

この国を揺るがす調査をしている最中に、あのような告白まがいのことを言い出すなんて。

どれだけ私の心を搔き乱せば気がすむのですか、ジュリアス様は。

あなたが一体なにを考えていらつしやるのか、私にはさっぱり理解できません。だつて、今まで一度だつてそんな素振り、見せたことなかつたではないですか。ジュリアス様は私をからかつていらつしやるだけ。そう結論づけて、私は無理矢理思考を停止させたのでした。

第二章 拳で鎧をして差し上げましょ♪

翌日^{よくじつ}の朝^{あさ}。

宿^{やど}にジユリアス様^{さま}の姿^{すがた}はありませんでした。

お部屋^{へや}には「少し出でてくる。昼^{ひる}までには戻るから、奴隸商^{どりいしょう}との交渉^{こうじょう}は任せた」との書き置き^{おき}がしてありました。

昨日^{きのう}の今日^{きょう}で、彼^{かれ}にどんな態度^{たいど}で接^{せつ}すればいいかわからなかつた私は^{わたし}、顔^{かお}を合わせずにすんだことに胸^{むね}をなで下ろ^{おろ}します。

さあ気^きを取り直^{なおす}して、ザザーラン様^{さま}のお宅^{たく}へとまいりましょ。

私^{わたし}とナナカは、再び貴族街^{きぞくがい}へとやつてきました。

今日のナナカは執事服^{しふじふく}ではなく、簡素^{かんそ}な半袖^{はんそで}のシャツと、七分丈^{しちぶたけ}のパンツをはいております。

奴隸^{どれい}になつたら捨てられてしまうから、執事服^{しふじふく}は返^{かえ}しておきたいと言^いわれたのです。

別^{べつ}にかまいませんのに。

まあ、ナナカが帰^{かえ}つて來た時に、再び見繕^{みつくろ}うのは面倒^{めんどう}ですかね。

私が保管^{ほかん}しておいたほう^{ほう}がいいでしょ。

「お約束^{やくそく}通り、わが家の奴隸^{どれい}を差し上げましょ。その代わりお願^{ねが}いした件^{かた}、お忘れなく」

「承^{うけたまわ}りました……と言^いいたいところですが」

ソファに深く腰^{こし}かけたザザーラン様^{さま}が、もつたいぶるよ^うにニヤリと笑^えみを浮かべます。

なんでしょ。

この期^こに及ん^{およ}で、なにか条件^{じょうけん}でも付け足^たすつもりでしょ^うか。

あまり調子^{ちょうし}に乗^のられると、私もそろそろ手^てが滑りかねませんよ。

ジユリアス様^{さま}の一件^{いっけん}と、この成金趣味^{なりきんしゅみ}のお家のせい^{せい}で、ただでさえ気^き分^{ぶん}が悪^{わる}いといいますのに。

「取引^{とりひき}をする前に、その少年^{まご}が本当に獣人族^{じゅうじんぞく}であるかを確認^{かくにん}させてほしいのです。この場^ば

で獣化してもらつてもよろしいでしようか？」

よつじんぶか

いまさらなにを言い出すのかと思えば、そんなことでしたか。用心深いことで。

「うたが
「疑つていらつしやるのですか？ 私があなたを騙そうとしていると」

わなたし
だま

「いえいえ、滅相もありません。ですが、念には念を……ですよ。琥珀の瞳に黒髪は確かに獣人族の特徴ではあります、稀にいるのですよ。奴隸をそのように変装させて、高く

売りさばこうとする悪人がね」

「はあ。わかりました」

「奴隸の売買をしている時点で、あなたこそ悪人確定なのですが。

自分たちの行いを棚に上げようなど、片腹痛いですね。

「ナナカ、獣化してあげなさい」

「……わかった」

「ナナカの姿が人型から黒狼へと変わります。

それを見たザザーラン様は「おお！ 素晴らしい！」と歓声を上げて拍手しました。

「ほ
裏められたにもかかわらず、ナナカはそっぽを向いてピクリとも動きません。

「……わかった」

「これほどの
ツヤと毛並み

瞳の大ささと
美しさ

「素晴らしい…

オーラクションの
目玉商品は
こいつに決まりだ！

当然ですわね。

このような人買のクズに褒められたところで、嫌悪感こそあれ、嬉しいはずもありませんから。

「素晴らしい……これほどのツヤと毛並み。それに瞳の大さと美しさ。オークションの目玉商品はこいつに決まりだ」

「お気に召したようで幸いですわ」

「オークションにご招待するだけで、これをいただくのは申し訳ないほどです。よければ後ほど、わが家で飼つてある奴隸を紹介しましよう。格安でお譲りしますよ」

「結構です。欲しい奴隸はオークションで見繕いますので」

「ああ、そうでしたな。元々あなたは、オークションに出る希少な奴隸を見つけるために、ツテを探して回つていたのでしたな。しかしこの獣人族に勝る商品となりますと、探すのもなかなか骨が折れるのではないか?」

「一体どのようなものをお探しで――」

「その時、ガチャリとドアが開き、筋骨隆々で毛深い殿方が客間に入つてきました。

そのお方は、部屋に入つてくるなり私をジロジロと無遠慮に見できます。

「ザザーラン様のお客人でしようか。あまりに下品で教養のなさそうなお顔をしていらつしやるので、山賊の襲撃かと思いました。

「ご主人、今日仕入れる奴隸つてのは、この女か?」

「ははは。違うよ、ドノヴァン。その女性は奴隸を売りに来たお客様だ」

「なんだ、ちげえのか。女なら売る前にたつぶり楽しめたのによ」

「おい、いい加減無礼だぞ。まつたく。すみませんね、わが家の奴隸は娘がなつていませんで。お恥ずかしい限りです」

「……別に、気にしておりませんので」

「この人間離れした体格と獣臭。

「人間と魔獣のハーフであるライカансロープでしょうか。」

「おそらくは護衛用の奴隸といつたところでしようね。」

「お、いやあ奴隸はこっちの狼のほうか。この毛色と目の色、獣人族か?」

「ああ。オークションの目玉になつてもらう、ナナカ君だ。くれぐれも丁重に扱つてくれ

たまえよ

「なにぬりいこと言つてんだ。獣人族といやあ、再生力が高くて有名なんだぜ？ ちよつとばかり手荒に駄けても問題ねえよ。オラ、来い！」

ドノヴァンさんがナナカに首輪をつけて、リードを強く引っ張りました。首が絞まつて苦しいのか、ナナカは「グルル……！」と低く唸りながら、しきりに頭を振っています。

「この！ 言うこと聞きやがれ！ クソ犬が！」

ドノヴァンさんが懐から棘つきの鞭を取り出します。

そして抵抗するナナカに向かつて、容赦なく鞭を振りかぶりました。

それを見た私は、とつさにソファから立ち上がりつて手を伸ばし――

「――どうやらここには、まつたく駄がなつていないペットがいるようですね」

振るわれた鞭の先端を、手で掴み取りました。

「あ……？」

まさか自慢の得物を手掴みされるとは思つていなかつたのか、ドノヴァンさんは口をあ

んぐり開けたまま、目を見開いています。

知能の低そうなお顔をあまり私に向けないでくださいますか？

顔面パンチを叩き込みたくなります。

「おつむの弱いバカなペットには、この私が直々にお仕置きをしてあげましょう」

にこやかにそう告げると、ドノヴァンさんはハツと我に返つて不愉快そうな声でおつしやいました。

「おいおい、この犬はもうご主人のものだろ？ 困るんだよなア、人の家の駄に口を出されちゃ。それとテメエ……」

ドノヴァンさんが鋭く尖った犬歯を剥き出しにして凄みます。

「誰がおつむの弱いバカなペットだ？ あと、お仕置きするとかなんとか、舐めたこと言つてくれたなア？ ぐちやぐちやに引き裂かれてえか、このアマア……！」

「まあ恐ろしい」

本当に恐ろしいわ。あまりにも怖くて怖くて……

この方を、必要以上に痛めつけてしまいそうです。

にど わたし はんこう おも 二度と 私に反抗しようと 思えなくなるくらい、徹底的に。

「お嬢さん、あまりうちのドノヴァンを挑発しないほうがいい。察するに、あなたにも多

少の武術の心得はあるのでしようが——」

やれやれと肩をすくめながら、ザザーラン様が自慢げなお顔でおっしゃいました。

「その男、奴隸に落ちる前はA級冒険者だったのです。報酬の分配で揉めてパーティーメンバーを殺したのがきっかけで奴隸になりましたが、その実力は折り紙つき。わが国の

騎士団長クラスでも負えない、化け物なのですよ」

自信満々に説明していただいているところ、申し訳ないのですが……A級冒険者とい

うものが一体どの程度の腕前なのかわからない私にとっては、そのお話、まるでピンと来ません。

「それがどうかなさいましたか？」

「ですから、余計な口出しは危ないとご忠告を——」

「もう遅えよ、ご主人。俺が客だとか女だとか気にして、なにもしないとでも思つたか？」

あたま き
頭に来たぜ、このクソアマ！」



ザザーラン様のお言葉を遮りながら、ドノヴァンさんが思い切り鞭を引いて私を引き寄せようとしてきます。

どうやらご自分の腕力に相当自信がおありのようですね。

察するに、今まで自分の思い通りにならない者はすべて、ご自慢の力でねじ伏せていたのでしょうか。

ですが世の中、上には上がいるものです。

それをいまこの場で、私が思い知らせてあげましょう。

「あ……？」

どれだけ鞭を力強く引こうとも、まつたく動かない私の様子を見て、ドノヴァンさんが眉をひそめます。

なにかの間違いだと思つたのか、力加減を確認するかのように何度も鞭を引くドノヴァンさん。けれど私は、涼しい顔で一步たりともその場から動きませんでした。

「ど、どうなつてやがる!?」

ついには両手で鞭を掴み、思い切り引つ張り出します。

「わたくしと綱引きでもしたいのでしょうか。
まつたく、やんちゃなペットですね。
「まさか、この程度で全力ですか？」
「う、うるせえ！ なんだ、なんだこれは!? なんでこんな細腕の女一匹動かせねえ!?
うおおおおお!!」

背を反らしながら体重をうしろにかけて、全力で鞭を引っ張るドノヴァンさん。
あまりにも必死すぎて、いつそほえましいくらいです。

「こ、これは一体……？ おい、ドノヴァン。ふざけているのか？ そうなのだろう!?」
「ちげえよご主人！ こいつ、俺が全力で引っ張つてゐるのに、ピクリとも動きやがらねえ！ なんつーバカ力してやがるんだ……！」

まあ、失礼な。

貴族の令嬢を捕まえてバカ力、だなんて。

口の減らないペットには、やはりお仕置きが必要ですね。

さて、ザザーラン様

「は、はい……っ!?」

「このお方、ドノヴァンさんはオーテーションに出品される商品なのでしょうか？」

「い、いえ……その男は私個人の護衛兼、他の奴隸の調教係で——」

「そうなのですね、よかったです。——では遠慮なくブッ飛ばせます」

「……は？」

鞭を握る手に力を込めて、思い切り引つ張ります。

「失せなさい——この愚か者が」

「ぎ——っ!?」

一瞬にしてドノヴァンさんが引つ張られ、背後の窓ガラスを突き破つてはるか彼方に飛んでいきました。

少し遅れて、遠くのほうで破碎音と悲鳴が聞こえます。

どこか別の貴族の家にでも突き刺さつたのでしよう。

まあ、あの速度と飛距離から考へるに、いくら生命力が強いライカンスロープとはいえ、しばらくは再起不能でしょうね。自業自得ですが。

「かわいそうに……痛かつたでしょう？」

私はナナカのそばに屈み込み、首輪を外して首元をなでます。

首輪が食い込んだ部分にはミミズ腫れのような痕がつき、血がにじんでいました。

「優しき風よ、彼の者の傷を癒やしたまえ」

ヒールの魔法をかけると、すぐにナナカの傷が治ります。

……よかつた。

あまりに深い傷だと魔法を使つても痕が残る心配があつたのですが、ちゃんときれいに治せたみたいです。

「ちゃんと迎えに行きますから。少しの間だけ我慢しててくださいね」

「わう」

ささやきかけると、肯定するかのようナナカが小さく吠えます。

そして、私の手から血が滴つていてことに気づき、心配そうに頭をすりつけてきました。

「ふふ。大丈夫ですよ、あとで治しますから。心配してくれてありがとう」

「あたまやさっぽん、ともふもふした頭を優しくなでてやりながら立ち上がりります。

立ち読みサンプル はここまで

「ソフトアのほうを振り返ると、ザザーラン様が口を開けたまま固まつておりました。『そういえば先ほど、奴隸を格安で譲つていただけたとおつしやつていましたね』

「は、はひつ！」

「お一人壊してしまいましたし、色々と弁償する費用も必要でしよう。ナナカをお譲りしたお札は、これでチャラということでいかがでしようか？ それと――」

私はゆつくりとザザーラン様に歩み寄ります。

顔面蒼白で震えている彼に、私は微笑を浮かべながら言いました。

「あなたにとつて、奴隸は大切な商品なのでしょう？ 商品価値を下げたくなければ、手

荒に扱わないほうがよろしいかと存じます」

「き、肝に銘じておきますう！」

引きつったお顔で、ザザーラン様がブンブンと首を縦に振りました。

ここまで釘を刺しておけば、もう二度とナナカに手荒な真似はしないでしょう。

あとは一日後を待つだけですね。

それから、約束通りオーランション会場の場所を教えてもらい、私はザザーラン様にもう

一度ほほえみかけました。

「では、オーランション当日の夜にお会いいたしましょう。ご機嫌よう」

ザザーラン様の邸宅を出て商業区に戻つてきた私は、ずっと泊まつていた宿の前に気はつきました。慣れた馬車が停まつていていたことに気がつきました。

「はい、わが家の家紋つきの馬車ですね。

ということは、中に乗つていらつしやるのはもちろん――

「――ようやく見つけたぞ、スカーレット」

馬車から降りてきたレオお兄様が、いつも以上に厳しくお顔をしかめて立ちはだかりました。

「ご機嫌よう、レオお兄様。本日はどのようなご用件でしようか」

「誤魔化しは通じんぞ。とりあえず馬車の中で話を聞こうか」

がつしりと肩を掴まれ、私は助けを求めて辺りを見回します。すると馬車の窓越しに、

ジュリアス様の観念したお顔が見えました。